

火を投げ込むイエス(ルカ 12:49-53)

今日の聖書を見ますと、私たちがあまり好まないことをイエス様はおっしゃっています。私たちは、できるだけ家族仲良く平和に暮らしたい、また、周りの人々ともそのような平和な関係を維持して暮らしていきたいと願っているかもしれません。信者の私たちも大体同じ願いを持っているのではないかと思います、本当に信者の私たちにその願いは望ましいものでしょうか。それが信者の願いとしてふさわしいものでしょうか。結論から申し上げますと、信者は人間的に平和に暮らすこと、仲良くトラブルなく生きていくこと、それが願いではありません。もしそのような願いを持っているとすれば、必ずその通りにいかないで葛藤が生じることになり、神の答えがあるにもかかわらず、その答えが見えなくなってしまいます。信者の願いは、この世に神の国が臨まれること 1 本だけであって、人間的に肉体的に仲良く平和に暮らすことではありません。そのような願いを信者ももしかして持っているかもしれないということで、そこにイエス様が火を投げ込むようになるよ、平和ではなくて分裂なんだということをおっしゃいました。なので、今日の聖書の箇所を通して、なかなか変わらないとは思いますが、私たちの願いを吟味して、もしかして人間的な肉体的な願いを持っているのではないか、それがこれから私たちが信仰の道を歩み、神の答えによって人を生かす見張り人としての人生を歩くように神様は祝福されたにもかかわらず、それとは縁の遠い人生を歩む理由になります。そこが修正されるような礼拝になることを祈りたいと思います。そのような人間的な願い、なかなか変わらない人間的な願望、そこに福音の火が投げ込まれる、そのような礼拝になることを祈りたいと思います。言葉を変えますと、信者の私たちは、天にある霊的すべての祝福をいただいている者、それをもって暗闇に捕らわれている人々を生かすために世に生かされて存在している者なので、そのことが私たちの一步一步の歩みに具体的に現れる証人としての勝利の人生を信じて、そのために覚悟を決めていただきたいと思います。どのような覚悟なのでしょう。イエス様が、わたしは火を投げ込むために来たのだ。平和ではなくて分裂なんだ。私たちの頭の中に入っていた既存の考え方、イメージなどが全部ひっくり返されるようなみことばの力が皆さんに働く、そのような礼拝になることを心から祈りたいと思います。もしそこが変わらなければ、私たちが礼拝をささげて、福音、福音と言いながらも、その福音が自分の肉体的な、人間的な願いを成就するための道具として扱う残念な信者になってしまうからです。

1. 福音は地上に霊的戦争を引き起こす。

なので、第 1 に何を覚悟すべきなのかと言いますと、イエス様がこの地上に火を投げ込むとおっしゃったのは、それは戦争のこと意味します。なので、福音は私たちに救いを与えるものに間違いのないのですが、その福音が照らされて与えられたときには、地上に霊的戦争を引き起こすことを覚えて、戦争を覚悟しなければいけません。

福音は火を投げ込むことなのです。

1) 光と闇、いのちと死をあらわに

暗闇の地上に福音の光が照らされるので、今までにはそういうことがなかったでしょうけれども、例え何かのトラブルがあっても、暗闇の中でのいざこざに過ぎないものだったでしょうが、本物のいのちの福音、真理の福音がそこに入ってきたときに、そこでは今までにはなかった戦争が起きることになります。福音は霊的戦争を引き起こすものなんだということをぜひ覚えて、残りの生涯、できるだけ平和に穏やかに暮らしたいという思いは全部捨ててください。それは、私たちの内側で神の国が臨まれまして、死の影の谷を歩いていても奪われない平安をもって歩くことには間違いありません。しかし、人間的に、肉体的に、世的に穏やかに暮らしていくということとは話が違う話なのです。なのに、多くのクリスチャンが、信仰を持つようになればそういう風になるだろうという期待をもって、そのような願いがなかなか変わらないのです。もちろん人間的にぶつかり合っ

て平和に取り戻されることになります。それとこれとは話が違う話なのです。特に信者の私たちにおっしゃっているのです。火を投げ込むために来ましたと。霊的戦争の人生をこれから歩いていくんだということを覚悟しなければなりません。福音がこの地上に照らされると、そこで何が光なのか、何が闇なのか露わになります。何が本当の本物のいのちなのか、何が死なのか明らかに現れることになります。だから、福音はこの地上に火を投げ込むものとして表現していらっしゃるのです。

2) この世はサタン(暗闇)の国(12 戦略)

なぜなのでしょう。私たちはこの世界がどんなところなのか勝手に思い込んでいらっしゃるでしょう。また、学校、マスメディアを通していろいろな教育を受け、いろいろなものがインプットされているかもしれませんが、聖書は1秒も迷わずにこの世界、この世は悪魔サタンに支配されている暗闇の国なんだと、そこを知らないといけません。なので、神を離れてしまったこの世界に悪魔サタンは落とし穴を作って、みな2度と神様に会うことができないように、そこに引き落とししているのです。神のいらっしゃらない、神様がいない、自分中心という落とし穴があるわけです。そこにみな引き落とされて、自分の奴隷となります。目に見えるものがすべてであるかのように、肉という落とし穴を作って、そこにみな落とされているのです。永遠の世界などは全く無知な状態で、目に見えるこの世界、この世でのどうのこうのがすべてであるかのように、この世という落とし穴を作って、みなそこに引き落とされて奴隷になってしまいます。自分と目に見える肉とこの世の奴隷になって2度と神様に会うことができないように、そして、さらにそれに釘を刺すために悪魔は枠を作ります。そういった自分と肉、この世での願いを叶えてもらうんだというふうに騙し、宗教を作って、宗教という枠に閉じ込め、偶像を作って、偶像という枠にみな閉じ込めて、シャーマニズムのような枠を作ってそこに閉じ込め、人々が二度と神様に会うことができないようにそこに閉じ込めてしまいます。場合によっては、イデオロギーという枠を作ってそこにはめ込み、人々が二度と神様に会うことができないように、サタンは策略を用いているわけです。それがこの世界なのです。国によって、時代によって、形がいろいろちょっとずつ変わるだけであって、根本的には悪魔の策略なのです。みな一人も例外なくその落とし穴に落とされ、枠に閉じ込められて人生を生きるわけです。なので当然、人生そのものは苦しみの連続、空しい人生になるしかありません。生まれたときから、あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出たものであると、もう滅びるしかない身分を抱えて生まれることになり、その運命の足かせに捕らわれることになります。そのあと、いくら自分で頑張ろうとしても、精神的に苦しむしかないし、肉体的に病を患うようになり、人間関係が崩壊して、人生はむなしくなり、人生にさまようしかないし、人生に疲れることになり、むなしい人生を歩くようになるしかない、その運命の足かせにはめられることになります。それに終わることはありません。一度は死んで、死んだあとは永遠のさばきに、永遠の地獄に悪魔と一緒に落ちるしかない運命を抱えて、その運命の足かせをはめられて人生を生きることになります。当然、これは自分の代で終わることなく、子孫たちに遺産としてそのままそっくり受け継がれるしかない運命の足かせをはめられて人生を生きることになってしまいます。これがこの世であり、この世を生きる人々の姿であります。

3) そこに光のキリストが

このような暗闇の世界に神様の愛によって約束通りにキリストが来られることになります。キリストはこの闇を照らす真の光なのです。真のいのちの光、キリストがそこに来られたときに、くっきりと分かれることになります。今まで暗闇に覆われていたそこでハッと気づいて、ここに光があるよ。私は暗闇だったんだね。それも知らずに自分なりにああだこうだと頑張って、疲れて重荷を負っていた、そういう人生だったんだね。私、間違ってたんだ。私だまされていたんだ。

4) 受け入れと拒否に分かれ

それに気づいて、光のキリストの方に来て、キリストを受け入れる者と、いやだ、なんだこれと、今まで私たちが暗闇の中で固めていたものを壊そうとしているのではないのかということで、キリストに対抗して拒否する者としてくっきりと分かれることになります。今まではその光が現れてな

かったので、みな仲良く同じ道具を持って、同じ趣味の中で、同じ理屈の中で仲良くしていた者の中に、そのような別れが訪れてくるようになります。

くっきりと。神は、キリストがご自分の民のところに來たのに受け入れなかった。しかし、受け入れた人、その名を信じた者は、神の子どもになる特権が与えられる。このようにくっきりとキリストを受け入れて、光の祝福の中に導き入れられる者と、キリストを拒否して闇がずっと好きなんだよと、彼らは光の方に来ること拒みます。

5) 闇は光を攻撃(イエス様のバプテスマ)

なぜなら闇が好きだからと聖書には書いてあります。そのように分かれてしまうのです。ただ拒否するだけではありません。そのときから闇が好きで、闇に属しているその人々は光を攻撃することになります。これが靈的戦争なのです。イエス様は今日おっしゃいました。私は火を投げ込むために來た。そのあと私には受けるべきバプテスマがあるよと。それがどれほど苦しいことなのかということをおっしゃっているでしょう。イエス様が受けるべきバプテスマは、イエス様が十字架にかけられることを意味します。なぜイエス様が十字架にかけられるのでしょうか。もちろん私たちを救われるためなのですが、光が來たら闇の勢力が光を攻撃して光を潰そうとした結果、イエス様は十字架で死なれることになるわけです。それがイエス・キリストを信じている信者に、光を受け入れて、その光を持つ光の子どもになっている神の民ひとりひとりにも同じく靈的戦争が起きるんだよと。それを覚悟しなさい。あなたがたの人間的な願い通りにいくわけにはいかないの、ちゃんと心得て覚悟しなさいよと。信者にこのような覚悟がありません。だから、このような靈的戦争が形として現れたときに、この覚悟がなかった者、人間的な願いがそのまま願いであった人々は、教会を離れることになります。自分の望んでいることと違うなと思って。それがどれほど悲しいことなのでしょう。覚悟を決めるように。信仰は自分で覚悟するからどうにかなるという因果応報的な話ではありませんが、このような靈的戦争が許されているので、覚悟を決めないといけません。

6) 関係の支え崩壊

それで、暗闇の力が光のイエス・キリストを攻撃してそういう反応が現れたように、イエス・キリストを受け入れた光の子どもになっている信者の私たちに、そうでない人々、暗闇にとどまっている人々が攻撃を仕掛ける関係になり、戦争の関係になってしまうのです。それでイエス様はおっしゃいました、家族の中で5人いたら2つに分かれて、3人が2人と、2人が3人と。父が息子と、息子が父と、母が娘と、娘が母と、姑が嫁と、嫁が姑と戦争が起きるよ。和解ではなくて分裂になるよと。それはわざわざ信者の私たちが分裂をもたらすわけではありません。原理的に光がそこに照らされたとき、火が投げ込まれたことなので戦争が起きてしまう、だから結果的にそうならざるを得ません。しかし、私たちがここで注目しないといけないことは、今までお互いの関係を支えていた、あるいは結んでいたその関係性が何の役にも立たないし、効果が現れないことです。言葉を変えますと、今までこの福音の光が照らされる以前に結ばれていた人間関係、関係性は全部壊れて崩壊していくようになるということなのです。それを恐れることなく覚悟しなさいと。家族という関係で結ばれていました。その家族という関係が、この靈的な戦争を止める力にならないのです。闇の力は家族、今までの環境を支えていた家族という支えを全部超えて攻撃を仕掛けるようになります。なぜでしょうか。父、娘、息子、姑ではなくて、裏で悪魔サタンが糸を動かしてるわけですから。私たちは家族だからという風に思うでしょうが、そのように行くわけにはいかないのです。今まで同僚だった、同じ国の人だった、友だちだった、恋人だった、そういう関係がこのような靈的戦争を引き止める力にはならないということです。言葉を変えますと、だからこそ、むしろいざばん身近なところから攻撃が始まるんだと。父と息子、母と娘、姑と嫁の話が出るのはそういうことなのです。それを恐れてはいけません。

7) 肉的争いを避け、妥協も避け

靈的戦争を引き起こすことが福音なので、それに対して覚悟を決めて、信者の私たちはそこでそのような攻撃があったときに肉体的に対処して争うということは避けなければいけません。なにこれ。なんでこういうことするの、という肉体的な対抗、争いは避けるべきです。しかし、だからと

いって妥協することは許されません。妥協は避けなければいけません。それは闇の力の攻撃なので。そこで家族だから、友達だったから、恋人だったから、夫婦だったから、その関係を維持するために譲ろうか、妥協しようか。それは家族関係、夫婦関係のように思うでしょうけれども、言い訳に過ぎないものであって、悪魔に譲ることなのです。火を投げ込むために来ました。平和ではなくて分裂なんだと。特に今の時代、どこの時代でも同じでしょうけれども、今の時代、世界中に教会は多いけれども、

このような聖書にあるお話をありのまま語る教会が減多にない時代になってしまいました。私たちのこういうお話がマイノリティになる可能性があります。世論に便乗してみながそうしているではないか。家族の平和を守るために、という大義名分などを取り上げ、信仰を妥協するように悪魔サタンが働きかけていることも知らずに。覚悟を決めないといけません。そういう意味で、私たちはこのような覚悟が求められます。

2. 信者の最高の価値、最高の選択はキリストとの関係に。

2 番目です。なので、こういう霊的戦争が引き起こされることをしっかり覚えて、信者の私たちの最高の価値、最高の選択は、家族関係でもなくて、キリストとの関係にあるものなんだということを覚悟しないといけません。

1) 暗闇にいる人々への姿勢

－受け入れ、超越、祈り

先ほども申し上げましたように、暗闇に属して、何も知らずに光の私たちを攻撃する人々に対して、こういう姿勢を保たないといけません。それは全部わかっているから受け入れるわけです。余計な肉적인争いなどしないで、それを超越し、彼らのために祈るということが私たちの姿勢なのです。

2) 人間的(肉적인)なものを失うことがあっても

－疎外、迫害、追放、訴え、憎しみ、関係崩壊、喪失

しかし、だからと言って、その結果、今までの関係が壊れて、人間的なもの、肉적인なものを失うことが十分あるわけです。それを恐れて妥協したりしてはいけません。それはつきものなのです。今まで最初から最後まで聖書を見ますと、みな同じことです。だから、私たちが光の方に移されていることで、そうでない人々、いちばん身近なところ、今まで本当に親しい関係にあった人からでも、いろいろな攻撃があるかもしれません。疎外されることも、迫害を受けることも、時には追い出されることもあるかもしれません。法廷に訴えられることもあります。憎まれることもあるし。だから、今までの家族関係、恋人の関係、友達関係、同僚の関係等々の関係が全部崩壊し喪失してしまうようなことがあるかもしれませんが、覚悟しないといけません。それは、私たちがわざとそうしようとしたわけではありませんけれども、結果的にそうならざるを得ない霊的戦争であり、つきものだということを覚悟しないといけません。何が大事なのでしょう。私たちにとって最高の価値はキリストなのです。申し訳ありませんが、家族関係ではありません。恋人との関係、夫婦関係でもありません。親子関係でもありません。もしそれがいちばん大事だと思っている人には、そこに火が投げ込まれることになるでしょう。覚悟しないといけません。正直申し上げますと、最近、外に出て、海外に出て、人種も経済の生活の水準などもみなバラバラで違うのですが、私の目にはみな死んでいるように見えます。みな一緒なのです。皆さんの本当に愛くるしい子どもたち、家族、親戚の方々がそういう目に映らないといけません。それを言葉にすぐに出すかということではありませんが、いちばん身近な人々に、皆さんがどういう思いで何を祈っていらっしゃるのでしょうか。できるだけ仲良くなるように。それは間違いなのです。極端に申し上げると、あまりにも仲良くしていらっしゃることは、もしかして火が投げ込まれるべきなのにそうでないでいる可能性もあるのです。もちろんこちらで福音が理解できていて聖霊充滿になるので、人間的な争いに巻き込まれることなく譲るからトラブルなく進んでいく場合もありますが、そうでなければ私が信仰に立っているのにそうでない人から何もされないということは、皆さんの信仰をちゃんとチェックしないといけないのではないのでしょうか。生ぬるい信仰だから、別に闇の方から見たときにも、大

したものではないから放っておいてもいいか、そういう感じかもしれません。また、皆さんなりに自分の基準で、まあ、あまりにも信仰で熱心にとকা目立つようにしないで、平和に程々にと思っているからそうなるかもしれません。それは良いことではありません。その相手にとっても良いことではありません。皆さんの内側に福音があることが間違いなければ、必ず炎の火の戦争が起こるはずなのです。そこで私たちは負けることなく勝利できるはずだし、それがうまく収まるのが勝利ではなくて、追放されて勝利する場合もあるし、向こうが跪いてキリストを受け入れる場合もあるし、どっちになるかわかりませんが、私たちはしかり立っていないといけません。何が幸せでしょうか。何が平和なのでしょう。戦争がなければ平和でしょうか。トラブルがなければ平和なのでしょう。そうだ、宗教間で争うことなく、世界平和のために、宗教が互いに手を取り合って、イスラム教もキリスト教も仏教もヒンズー教もみな譲り合って一緒に行きましょう...それで平和になりますか。それが平和でしょうか。私たちはそういうレベルの悪魔が作り出した世の流れに従っているこの世を歩いている者なのです。そこで私たちは救われた者なのです。引き上げられた者なのです。神の国の方に導き入れられて、闇の国から解放されている者なのです。

3) 喜んで Only キリスト、絶対キリスト、キリスト充分

—マタイ 5:10-12

なので、人間的な肉体的なもの、関係を失うことがあっても、喜んで Only キリスト、絶対キリスト、キリストで十分、キリストで私は幸せですよと告白するようにならないといけません。イエス様もおっしゃいました。山上垂訓で弟子たちにこのようにおっしゃいました。マタイ 5:10-12「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです」。私たちの内側に闇の国から解放されて神の国を持つことが間違いなければ、迫害はつきものなのです。当然です。「わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです」。ゼビ院がが何なのか、この世界は、世の中はどういうところなのかを改めて整理し、霊的戦争は避けられないものなんだ、当たり前なんだと思って覚悟を決めるように。その霊的戦争において信者がうろちょろ負けてはいけません。私たちに勝利の旗を掲げるために許されている戦争なのです。

結論を言いましょう。サタンは人間的な肉体的なものを奪うことで、信仰を妥協するように、その妥協の落とし穴に引き落とそうとします。それを肝に銘じましょう。人間的なもの、肉体的なもの、関係等々を奪うことで、私たちを脅かして、だから、妥協しなさいよ。家族が壊れるのではないか。今まで築いてきたものが全部パーになるのではないのか。もったいないのではないのか。お前のせいなんだよ、家族がバラバラになるのは...として、だからイエスを捨てなさいよ、信仰などをほどほどにしなさいよと働きかけるものが悪魔のしわざだということを忘れてはいけません。それで、改めて信者の自分は光の子どもであるという確信をもって、それが霊的戦争というのは当たり前なんだ、私が光側に立っているという裏返しではないのかという意味での確信と感謝と自負を持ちましょう。常々、それで人間的な肉体的なことが信仰のネックにならないように、自分の内側にもしかしてそのようなサタンのやぐらがまだあるのではないのかということ吟味して、それが碎かれて人間的なもの、肉体的なものがどうなろうが全く構わない霊的サミットとして立つように。霊的サミットはそういう意味なのです。人間的なもの、肉体的なものが、現実の環境のどうのこうのがどう変わろうが、死の影の谷を歩いていこうが、刑務所の中にいようが、命が奪われようが構わないのです。それをサミットと言います。御座が私のやぐらだから、三位一体の神様が私のやぐらなのだから、もう私はいらない。地上のもの、肉体的なものに左右されるものではない。御座のやぐらです。空前絶後の祝福のやぐらが私のものなので、そのやぐらに立ったとき、この世に対する欲や欲望や願い等々は全部崩れていきます。霊的サミット、御座のやぐらが立つように、私たちの内側にネックになるような人間的な願い、サタンのやぐら等々がないのか吟味しましょう。

それで目的は、それに引っかかっていざこざする暇がありません。闇の中にいる人々を生かせる光の神殿として回復し、実際に人々を生かす答えの人生を歩いていかないといけません。これがメ

インテマなのに、そこにたどり着けないように、その前で霊的戦争ができないように、人間的なもの、肉的なもの等々に引っかかって、どうしようか、ああしようか…。覚悟を決めてください。誤解しないように。家族が、家庭がどうなってもいいよという話ではありません。でも、そういう話です。覚悟を決めるように。私たちの願い、基準は家族の平和ではありません。キリストなのです。キリストのゆえに家族に平和が取り戻されることは望ましいことです。しかし、キリストのゆえに父が息子に、息子が父に対峙することになれば、それを覚悟を決めて甘んじて受け入れないといけません。それで私は、たとえ戸籍から名前が放り出されたり、家から追い出されたり、さまざまな誤解を受けることがあるとしても、私はキリストに従って残りの生涯を歩いていくよという覚悟を決めないといけません。そのときに暗い目が砕かれて、皆さんが人のいのちを生かす人として整えられ、その門が開かれることを体験するようになるでしょう。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。地獄に行くしかない地獄のような人生を歩いていた私たちを憐み、キリストの血潮によって救い出して、暗闇から光へと導き入れられたことを覚えて感謝申し上げます。そのときから闇の勢力による攻撃があり、霊的戦争が起こることが当たり前であって、その覚悟を決めて、むしろそれが自分のアイデンティティを確認する最高の材料となって覚悟を決めて、何があっても、何を奪われても、信仰の道を貫き、人を生かす証人としての人生を覚悟することができるように、ひとりひとりを祝福してください。悪魔の甘いささやきに騙されることがないように、私たちの内側にあるそれに騙されるようなサタンのやぐらが、全部みことばによって砕かれるように、キリスト Only となるようにひとりひとりを祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。